

聖書:ルカの福音書24章1～12節

説教:ここにはおられません。よみがえられたのです

はじめに

主の復活を覚えるイースター礼拝を迎えております。パウロは、もし主のよみがえりがなかったならば、私たちは空しいものを信じているに過ぎないと言いました。それほど復活は大切な教えです。と、私はまるで分かっているようなふりをして言っていますが、クリスチャンになってしばらくの間、からだのよみがえりのことは信じられなかった。神話か何かのようなもので、実際にはなかったことなのだときえ思っていました。

では、二千年前、イエスに付き従っていた女性たち、弟子たちはどうであったか。この箇所では、イエスがよみがえられたという御使いのことばはありますが、まだだれもよみがえられたイエスを見ていません。なぜここで姿を現さないのでしょうか。不思議に思いませんか。きっと何か理由があります。そのことを考えてまいります。

1 女たちと主の使い

1) 日曜の明け方 途方に暮れた

1節を読みます。「週の初めの日の明け方早く、彼女たちは準備しておいた香料を持って墓に来た。」

金曜日の夕方、女たちはヨセフがイエスのなきがらをおさめた墓が石で塞がれたのを見ていました。ところがいま墓の前に行くとその石がわきに転がされ、墓の穴がぼっかりあいている。いったい何事がと戸惑いながら中を覗くと、イエスのなきがらが見当たりません。ヨハネの福音書には、マグダラのマリアはてっきり盗まれたのだと思って泣き出したとあります。他の女性たちも、このことをどう理解したらよいのか、まったく途方に暮れてしまいます。

2) よみがえられたのです

そこへまばゆいばかりの衣を着た二人の人が突然現れます。この、「まばゆいばかりの」と訳していることばは、「流れ星が落ちていくときのまぶしい光」という意味があります。女性たちが地面に顔を伏せたのは、恐ろしさと同時に、まぶしくてまともに見ることができなかったということかもしれませぬ。

そのまぶしい光の中で御使いはこう語ります。5節後半から7節。「あなたがたは、どうして生きて

いる方を死人の中に捜すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、主がお話しになったことを思い出さない。人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえると言われたでしょう。」

そう言われて、確かにまだガリラヤにいた頃、イエスが二度にわたって語っていたのを思い出します。思い出したのはけれど、目の前で起きていることとイエスが語ったことばと結びつきません。混乱したまま、とにかく女性たちは家に引き返し、いま見たことと聞いたことを報告します。

2 墓へ走るペテロ

1) なぜ

ところが十一人の使徒たちは、報告を聞いてもたわごとのように思えてまったく信じません。あの使徒たちでさえも、イエスがよみがえられたということを受け入れられなかったのですから、まして私たちがすぐに信じられなかったとしても、あたりまえです。

さてここで興味深いことが起きる。ペテロが立ち上がって、墓を見に行くのです。なぜわざわざ行くのでしょうか。そのことを考えるために時間を少し巻き戻し、イエスが逮捕された場面に戻ってみます。すぐに大祭司の家で裁判が開かれると、ペテロも屋敷の中にこっそりと忍び込んで様子を伺う。ところが、ある召使いの女にみつかって「この人も、イエスと一緒にいました」と騒ぎ立てられると、あわてて「いや、私はその人を知らない」と否定してしまう。そんなやりとりを三度繰り返したとき、外で鶏が鳴く。そのときペテロはイエスが、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います」と語っていたのを思い出し、激しく泣いた。そういうことが金曜日の明け方に起きていた。

2) 驚きながら自分のところへ帰った

そうして土曜日をはさんで日曜日の朝、女性たちの報告をペテロは聞きます。そのときのペテロの心を想像してみてください。非常に複雑だったはずですが、というのは、ペテロはかつてまるでやくぎの親分子分のように、イエスが死ぬときは私も一緒に死にますと、皆の前で宣言していたのです。それがいざとなったら、イエスなど知らないとは三度も否

定して逃げてしまった。私がペテロならこんな言い訳をするでしょう。「あのとき、逃げたのはよくなかった。でも、たとえイエスを見捨てず、イエスと行動をともにしたとしても、結果は同じ。イエスが殺されることは避けられなかった。どっちでも同じということなら、自分のしたことを忘れてしまおう。」こんな言い訳をしています。

そんなときに、墓が空っぽだったと聞かされたのです。忘れようとしたものを再び思い出すうちに、心に迫りを感じていても立つてもいられなくなり、墓に走る。行ってみたら確かに女性たちが話したとおりだった。それで家に引き返す。

あんなに心が刺され、突き動かされてやって来たのに、墓を見てすぐに元のところへ引き返す。ペテロに何も起こらなかつたように見えます。いいえ、よく注意してください。こう書いてある。「この出来事に驚きながら自分のところへ帰った。」「驚きながら」というのは、「おかしいな、へんだな、どういうことなんだろう」と頭をかしげながら、つまりなにも理解できていない、整理できないという意味ですが、わからないけれども何かとげのようなものが突き刺さるのを感じて、忘れることができない。

3 安息日の主

1) 罪人たちの手に引き渡され

ペテロに何か起きています。为什么呢。そのことを知るために、主人公であるイエスを見なければなりません。でもここには登場しない。いったいどこにおられるのでしょうか。

そこでヒントとなることばはなにかを捜しますと、御使いがわざわざ「思い出さない」と言つてところに目が留まります。7節。「人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえると言われたでしょう。」このことを思い出さないと言っています。

ここには、人の子であるイエスのからだに何が起こるか、三つのことが要約されています。一つ目、「人の子は必ず罪人たちの手に引き渡される。」罪人とは誰か。イエスを訴えたパリサイ人、律法学者、祭司長たち、あるいはヘロデ王やポンテオ・ピラト。それだけでしょうか。私たちは無罪だったのか。いいえ。神の前にすべての人が罪人なのですから、私たちは全員、この方を引き渡しました。

2) 十字架につけられ(忘れられ)

そして二つ目。「人の子は、十字架につけられた。」もつとはっきり言えば、神の子である方を罪人が十字架で殺したということですが、そのことをずっと覚えている人がいたのでしょうか。ペテロは、先ほど見たとおり、彼は金曜日の朝、急に恐ろしくなってイエスを三度否定し、その場から逃げて、激しく泣いてしまう。そのことをずっと後悔しながらも、時間が経つうちに、イエスは死んでしまったのだから、同じではないか、忘れてしまおう。十字架につけた自覚があいまいになり、みな忘れてしまう。

3) よみがえられた(思い出す)

そして三つ目。「人の子は三日目によみがえる。」この時点では、まだだれもよみがえられたイエスを見ていません。見たのは空の墓だけです。ペテロもそうですが誰もがまだ混乱したままです。いっけん、それ以上のことは何も起きていないように見える。

そうでしょうか。8節「彼女たちはイエスのことばを思い出した。」よみがえりの主はまだ見ていないけれど、イエスのことばは思い出しました。ペテロも自分の罪を忘れようとしていたけれども、墓が空だったのを目で見たと、忘れようとしていた自分の罪を思い出し、心刺されながら家に戻るので。

4) 罪を思い起こしていくとき、本当のいのちを見いだす

こうして見てくると、このときイエスのおられた場所について思い至ります。どこか遠くにいたので、よみがえられた姿を見せてはいなくとも、女たちの心に、ペテロの心に、そして私たちの心に問いかけておられたのではないですか。

人々が、主のみからだを死人の中、つまり墓の中に捜そうとしていたとき、主は、私たちの心のうちにあるものを捜しておられたのではないですか。あなたはあのとき何をしたのか、それをもう一度思い出さない。過去のいやなことは取り返しがつかない、だから忘れようと思つていたかもしれない。でも、過去のことにふたをしたままならば、あなたは決していのちを捜し出すことはできない。本当のいのちはどこにあるのか。あなたの通つてきた道を振り返りなさい。見たくないふたをして暗闇に閉じ込めたところに本当のいのちがあるから、そこを捜しなさい。

日曜日の朝、ペテロは墓の中をのぞき込んだとき、自分のしてきた罪を思い出す大きなきっかけ

となりました。それと同じことは私たちにも起きます。私たちがイエスを十字架につけて殺したというのなら、イエスの墓はどこにあるのか。私たちのうちにあるのではないか。私たちは、あるとき迫られてその墓の穴をのぞき込み、忘れていた罪を思い出す。そうして初めて私たちは本当の救い、永遠のいのちに出会っていく。

なぜ主はすぐによみがえりの姿を現さないのか。私たちが主を迎えるために整えられていく。その時間さえも主が備えてくださっていた。

よみがえりの主の与えてくださるものの深さと豊かさを覚えて、御名をあがめたいと思います。